あぶらむ通信

第12号　1992年6月20日　あぶらむの会発行

〒509－41　岐阜県吉城郡国府町宇津江　TEL 0577－72－4219

あ じ さ い

飛騨古川町在住　切り絵作家　菅沼　守氏作

飛騨だより

昨日無事終った田植、今日は朝から恵みの雨となりました。雨にうたれた新緑の鮮かさは何と表現したらよいのでしょうか。再び緑溢れる季節となりました。皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

季刊のあぶらむ通信なのに、いつのまにか春秋二回となってしまいました。自分ではつい昨日出したばかりと思っているのですが、もう半年も過ぎているのです。どうしてこうも時のたつのが早いのでしょうか。地球環境の激変で、時間までが狂ったのではないでしょうか。皆様にはご無沙汰お赦し下さいませ。

事務局の西田さんより再三の原稿催促、「二、三日のうちに」といつも同じ返事でいつしか三ヶ月が過ぎてしまいました。今年の雪どけは半月も早く、三月中旬には土が顔を出し始めました。それと同時に野外作業が一勢にスタート、やらなければならない作業項目を壁にはり出し、終了したものに赤線を入れて行くのです。雪囲い解除、道補修、シイタケ・ナメコ植菌、ブルーベリー定植、薪づくり、薪小屋づくり、作業棟クレオソート塗り、田畑おこし、引越し、スタッフ・ハウスづくり、野菜種まき、田植……等々。しかし、女房と二人では作業終了の赤線がなかなか増えません。時に農作業は待ったなし、時季をはずすと一年棒にふってしまうのです。それに今年はお借りした田が一挙に6反と、本格的百姓となってしまったのです。

このように作業山積の中で孤軍奮闘中の私たちに、強力な助人が現れたのです。三人も一度に。

大野正雄君は日本青年奉仕協会（JYVA）から派遣の一年間ボランティアです。飛騨千光寺住職の大下大圓さんのお骨折りによるものです。大学では原子力を学んだ彼ですが、どういう訳か農業とケーキづくりに造詣が深く、特に彼のつくるシフォンは一級品で、食後の団欒に大きな色どりを添えてくれています。また、掃除、後始末がこれまた一級品で、前に進むばかりでそこいらじゅうちらかしっぱなしの後始末の出来ない私の側で、黙々とかたづけ仕事に精を出している彼です。

富田桂さんは今春大学卒業のバリバリのフレッシュ・ウーマンです。自分自身を深く見つめ、将来をしっかりと見つめたいということであぶらむへやってきました。奇麗に着飾り、華やかな世界にあこがれる年ごろなのに、毎日、田や畑で土にまみれ、また限りなく続く家事の仕事を明るくこなしています。女房のよきパートナーです。

古屋正吉君は15才、この一年間自分の進むべき道を見つけるためにここへやってきました。とっても素直で、きつい労働にも明るい笑顔でよく体が動きます。彼はどちらかといえば口数少ない方ですが、返事は言葉ではなく笑顔でするのです。最近わかったことは、彼は笑顔に肯定、否定、中間の三種類があることです。私のように目を三角にして否定するのではなく、笑顔で否定するなんて、彼は相当な大人です。私にとっては息子が一人増えた感じですが、どちらが大人か子供なのか……、意見が分れると

田植準備

ころです。

大きな建物のあぶらむとはいえ、一年間生活を共にする者が三人増えるとやはり住宅難、いずれは必要なスタッフ・ハウスです。これを機会に建てることにしました。大工の作業所を他に移し、その建物を改築することにしました。片町さんの指導で、作業は全て自分たちで行います。田畑仕事の合間に板けずりや壁張りと、遅々とした中にも自分たちの手でつくった自分たちの室が出来上がって行くのです。夏までに仕上がればと思っています。

春を迎えるまでの間、あぶらむと交わりのある二人の良き旅人が天に旅立って行きました。一人は乳ガンが肺に転移し、再手術を前に、ひょっとすればこれが最後の旅になるかもしれないということで、一人想い出多い飛騨を訪ね、わずかの間でしたがあぶらむを訪ねられたTさんです。42才と未だ若く美しい人でしたが、気負いもなく自分の病状に対して淡々と話されました。ガンという自分の病気をこんなにも冷静に見つめるが出来るものなのかと、彼女の心の強さに圧倒されました。しかし、夜になると不安で眠れないということで、睡眠薬が欲しいということでしたので、懇意にしていただいている近所の片町先生に連絡を取りました。「僕もこれまでいろんな患者さんを見てきたが、あの人ほど自分の病気としっかり向き合い、つきあっている人初めてですヨ。いろいろ考え、教えられました」と片町先生も言っておられました。「自分の生命よりも残して行くことになるかもしれない一人息子が心配、自分に万一ありましたら息子をよろしくお願いします」と言っていた彼女も、それからわずかして旅立って行ったのです。しかし、何という大きな人生の旅人でしょうか。

もう一人は、若くしてご主人を天に送り出した卒業生のEさんです。ある時彼女は私に次のような手紙をくれました。私に人生の良き旅人の何たるかを教えてくれた彼女です。その手紙を紹介させていただきたく思います。

お手紙ありがとうございました。何度も繰り返し繰り返し読ませていただいています。先生の声がききたい。話をしたいと思い、電話の前までいくことは今までも何度かあったのですが、その度に、もうちょっと落ち着いてから、もう少し頑張ってからとダイヤルを回すところまでいけませんでした。たすけてと言いたいのに、SOSを発進することをよしとしない自分がいました。けれども先日の電話の際は、何のためらいもなかった様な気がします。声をあげて泣いたのは何年ぶりだろうと、電話を切ってからボンヤリおもっていました。鼻をかみながら、妙に安らいだサッパリした心持ちがしていました。主人の前では勿論のこと、両親や子供にも泣き顔を見せてはいけない、私がしっかりしなければと気を張ってきたからか、ひとりに

なって涙を流すことはあっても、声をあげて泣くということはありませんでした。いつの間にか、一人でいる時でさえ、思う存分泣ける時でさえ、声を出しては泣けないようになってしまっていたのです。

本当に久しぶりに声も鼻水も出して泣けて気持が良かった!! 私にはこれが必要だったんですね。カタルシスとはこのことかとおもいます。私の感情を解放してくださった先生に感謝しています。そして声をあげて泣ける相手をもっている私はしあわせだと感じています。今、ここまで書いてふと主人のことを考えました。彼も声を出して泣きたくても泣けないようになっいるのでないかと、強い父親、強い患者を精一杯やってみせている彼にも、私と同じカタルシスが必要なのではないかと思います。楽になって欲しいです。

あぶらむの里での野良仕事

闘病生活というのは全く戦争と同じだと思います。その渦中に身を置く者にとって一番つらいのは、それがいつ終わるのかわからないということです。昔、教科書で暗記した「三十年戦争」や、新聞・雑誌でよく目にする「二年間の闘病生活後……」等の記事……それが三十年だろうと、二年だろうと、また二ヵ月であっても、それらは皆、おわってしまってからいえることで、結果でしかありません。その長短の結果をながめて、大変だったろうとか、短くてよかったなどと判断することはできないと思います。その真中にいる者にとっては、どれもいつ果てるともなく続くたたかいであり、それを思うとき、しばしば絶望的な気分になってしまうのです。

最初の宣告からもうすぐ四年になります。生まれてくる子は、父親のいない子になるかもしれないという不安。一年以内という宣告をうけたのが妊娠四ヵ月の時だったので、正直いって、生まれた我が子を主人と二人でながめながら思ったのは、「しあわせェ〜」より、「間にあった.!」。主人いはく、「息子の誕生祝いをするまでは……」「オレの顔を覚えるまでは……」「三つの祝いまでは……死ねない.!」いつのまにか宣告をうけたという非日常は日常化し、息子も三才半です。四度目である今回の入院がいつまでなのか、この先どうなるのかわかりませんが、逃げようという気持ちはキッパリ捨てて、(逃げ出したい、自由になりたい、幸福になりたい……と悩みながらの結婚生活でしたが……) とことんつきあってやろうじゃないの.!という心境です。今、逃げてしまったら、生涯、自由にも幸福にもなりえないということにやっと気がつきましたから。主人のためでも、子供のためでもなく、自分のためです。

長々と書いてしまいました。いつか、「あぶらむの里」で先生にお会い出来る日を楽しみにしております。

御家族の皆様にもよろしくお伝え下さい。

お元気で。

九月十七日　　大郷先生

こうして彼女も自分の現実としっかり向い合い、必死に歩んできました。彼女の熱い祈りと看護の中、ご主人は一人静かに旅立って行ったのです。

このように「あぶらむの宿」にもいろんな人々が訪れ、いろんな問題が持ち込まれるようになってきました。少しづつ目的とする「宿」らしくなってきたように思います。しかし、私たちにはそれらの問題を解決したり、取り除いたり、癒したりする力など何一つありません。もしそうであれば、それは傲慢というものでしょう。ただ、ここにいらっしゃる間のわずかな「心のあくび」を提供できればと思うだけです。あくびとかおならは不思議とその瞬間、緊張感を払い去り、不用な力を取り除いてくれます。あぶらむの宿も、重い現実を背負って日々生きる人にとって、心のあくびができる、そのような安らぎの場でありたいと強く願っています。

この冬に出会った「旅人」について書いている私に、二つの喜びが舞込んできました。一つは私を今日まで教え、導き、支えて下さった沖縄の「愛楽園」（国立ハンセン病療養所）の人々19名が、6月11日このあぶらむの里を訪ねて下さるということです。中には両足義足の方もいらっしゃるとのこと、よくぞおいで下さることと感謝の気持で一杯です。「あぶらむの宿の完成祝もあるので、サンシン（三味線）ももって行きましょうね」との心使い、この宿に沖縄のサンシンが響き渡ったらどのような音色になるのか、想像するだけでゾクゾクします。私たちが最も尊敬する人生のよき旅人たちをお迎え出来ること、あぶらむとして大きな喜びで一杯です。

もう一つは、旅人の何たるかを教えてくれた鈴木芳子さんです。いつもあぶらむに多くの支援を寄せて下さり、宿では人一倍元気にはしゃぐ彼女です。“陽気な人”としか思っていなかった私は、彼女の手記を目にした時、ハンマーでなぐりつけられたような気持ちでした。彼女にお願いして、その手記をこの通信に掲載させてもらいました。「人生のよき旅人」としての彼女を、味わっていただけたらと思います。

さて、末筆になって恐縮ですが、この四月より、あぶらむの会の法人化を目指し、具体的準備を開始いたしました。その第一の仕事は「社員」（会員）づくりです。

これまであぶらむの会を支えて下さいました皆様方におかれましては、どうぞ今後とも「会員」として、末永くお支え下さいますよう、心からお願い申し上げます。

あぶらむの里も心はずむ季節を迎えました。どうぞお出かけ下さいませ。

皆様のおいでをお待ちいたしております。

1992年5月18日

あぶらむの会　代表　大郷　博

あぶらむの新しい仲間たち

古屋正吉くん

名前　古屋正吉15才。S52.1.25生まれ。現住所　東京都中野。特技ドッチボール、バトミントン、卓球など主に球技。趣味　たまに走るマラソン、寝る事、スポーツ、乗り物に乗る事など色々。好きな本　灰谷健次郎さんの「太陽の子」「兎の眼」などがある。好きな食べ物　カレーライス……嫌いな食べ物　パセリ、セロリなどがある。好きな女性のタイプ　やさしい、思いやりがある、普通で少し明るい。好きな動物犬。好きな映画　二十四の瞳。……動機　H.3の夏に、あぶらむの里を知りました。とてもほのぼのとしていていい感じでした。10月の初めごろ、僕は一足早くに、高校の受験をしました。山形にあるキリスト教独立学園と言う所を受けました。試験科目は、3科目で、数、国、英の3つでした。テストの方も、まあまあと言う感じだったし、面接も、思ったより緊張しないでいい感じに出来ましたので、大丈夫だろうと思っていましたが、結果は残念ながら桜が散ってしまいました。11月にも桜がちりました。あぶらむに来ようと思ったのが、2月の末ごろでした。もともと勉強が好きじゃない僕は、もう一度、自分にあった道を考えようと思い、あぶらむの方々に、お世話になってみようと決意しました。あぶらむなら、きっと自分にあった道をみつける事が出来るなと思ったからです。今は、土や木を使う事が多いので、将来、農業、木工、大工などやりたいなあと思っています。よろしくお願い致します。終り。

富田桂さん

大郷先生の暖かいまなざしや、育さんの明るい笑い声に包まれて、毎日楽しく過ごさせいただいています。昨年、大学のフィリピンキャンプに申し込んだことが大郷一家を知るきっかけとなりました。キャンプが中止になった夏休みの終り、ふらりと出かけたのが噂にきいていたあぶらむの里だったのです。その時にはまさか半年後からそこで生活することになろうとは夢にも思ってはいませんでした。

それまで大郷先生を直接知ることはなかったわけですが、先生をよくご存知の方々とお話する機会には恵まれていました。その方々の人柄や志向性がなんとなく好きでした。そして実際にあぶらむの里を訪れて感じた雰囲気と、ある方の「人と接するとはどういうことか、先生のところで見てくるのもおもしろいかもね」という言葉は、あぶらむの里でお世話になることを決める上で非常に大きかったように思います。

「南北問題はなぜいつになっても解決しないの」という幼い頃からの一つの素朴な問いは、世の中の仕組を知りたいという欲求になりました。在学中、山登りだスキーだと遊び歩く一方で、自分にしっくりくる視点を求めて講義を受け、本をめくっておりました。結局、「どう生きるか」「何が大切か」という足元の、自分自身の問題にならざるを得ません。今の私は、自分の持って生まれた分だけでいいから体の奥底の何

か、感受性の源を耕したいと願っています。悲しいかな無芸大食というコトバがぴったりの私です。東京に送り返されないよう頑張りたいです。このような機会に恵まれたことを感謝しております。どうぞよろしくお願いします。

三人の働き人
左より　大野　古屋　富田

大野正雄さん

日本青年奉仕協会から1年間ボランティアとして「あぶらむの里」でお世話になります大野正雄です。出身地は山陰の島根県・松江市です。こちらへ来る前は、実家の方で家業の手伝いをしていました。私はここに来ようと思っていたのではなく、1年間ボランティアの事務局の方で「あぶらむの里」を決定されました。その時の私の活動先希望は大阪の淀川キリスト教病院のホスピスでした。2月中旬の事務局からの連絡にすぐOKを出したのは、ここの紹介文を読んでです。「転んだら起きる」、「やがて自分で自分の魂を世話して行く」。この紹介文にひきつけられました。私は以前、東南アジア、インド・ネパール等を旅した事がありました。その時の各地で見たアジアの人々。そしてその姿を通して今の日本の現状を深く考えさせられました。物質的にはほぼ世界一と言っていい程の日本。しかし、その国で生きている我々は本当に幸せなのだろうか。

あの時のアジアの人々の笑顔。人生をよろこび、楽しむ事を知っている。その顔から多くの事を学び、感じました。そして旅の後自分と向き合う事をおぼえ、初めて自分を知りました。その中で「自分の魂は自分で」と思うようになりました。そしてこの度の「あぶらむの里」です。なにか運命的なものを感じています。この一年間で私にできる事がどれ程あるのかまったくわかりません。未熟な私ですが、一生懸命がんばりますのでよろしくおねがいいたします。

住職さんからのクリスマス・プレゼント

クリスマスシーズン、あぶらむではイエス・キリストの誕生劇を演じます。「僕にも配役を」と、千光寺住職の大圓さんからのリクエストがあったので、大圓さんには「ヘロデ王」を演じてもらいました。

「大郷さん、ところでヘロデ王ってどんな人ですか、偉い王様なのですか」、「ハアー、聖書によりますと幼児二千人以上を殺したということで、どうも大悪人のように書かれていますヨ」。「そうですか、僕は悪役ですか」。大圓さんのヘロデ王、なかなか迫力がありました。

そんな大圓さんからあぶらむへ、大きなクリスマス・プレゼントをいただきました。「あぶらむの里」と名前入りのジープでした。本当にありがとうございました。ところで大圓さん、今年のヘロデ王の役よろしくお願いします。

生きること、走ること

――乳ガンから再起して――　鈴木芳子

死ぬことだけを考えて生きた5年間

13年前、乳ガンを自覚した時、正直言って「安堵」な気持ちでした。その2年前に離婚し、「愛情」の意味を疑い、そのはかなさに絶望し、ただ生きていただけの私は、そこで人生にピリオドを打てると思ったのです。経済的にも行き詰まっていました。そのため早く楽になりたかったのです。逃げ出したかったのです。

「でも、子供たちはどうなるの？私一人を頼っている子供たち。誰が子供たちを育ててゆくの？」一方で湧き上がるそんな心の叫びに、私は耳をふさぎました。

乳ガン切除手術、入院という事態は、家計をますます追い詰めました。

そして私は、手術してもなお生きてゆかねばならない自分を呪い、生きてゆくことの苛酷さをこの身体と心にしっかり受け止めました。歯を食いしばっても食いしばれないものをこの身体に受け止めました。

それから、当然のことながら乳ガンが「再発」することを前提に生きる日々が始まりました。しかし再発する前に、子供たちを自立した人間に育て上げなければならない……。一朝一夕に「一個の人間」が形成されるはずのないことを百も承知で、しかしそれでも子供たちを自立させるため、私は日々の生活の中で何も手を出さず、遠くから見ているだけの親を、病弱で何もできない親を演じたのです。

同時に自分の身辺の整理にも心を配り、自然に、ごく自然に友人たちから遠ざかりました。自分が消えることになった時、悲しむ人を一人でも少なくしたかったからです。

そして転職。それからの私は、今まで入院していたことはもちろん、「乳ガン」という言葉も決して口にしませんでした。同情されたくなく、仕事上でも特別扱いされたくなかったからです。

身長160cmの身体にバスト90cm、ウエスト65cm、ヒップ93cmというスタイルを堂々と誇示しました。裸にならない限り、90cmのバストの下が「パッド」だなんて決してわからないことだし、「パッド」を入れるのなら、小さい頃から憧れていた「大きいおっぱい」にしたかったのです。奇しくも、乳房を失ってから表面だけでも夢に近づいたわけです。

夕方、仕事を終えて家に帰ると、身に着けている衣服を1秒も早く脱ぎ捨てます。朝は何でもない傷跡が、午後からは我慢できない痛みとなって「いい女」を演じている私に襲いかかるのです。夏、男性がステテコ姿で「よくぞ男に生まれけり」なんて涼しげにしている気持ちが心から理解できます。

消えることだけ考えて生きてきた5年間。「不老会」や「アイバンク」に連絡をとり、登録しました。私が消えた後の子供たちの養育・教育費は、私の生命保険が効力を発揮するはずです。この5年間の間に、子供たちは高校生と中学生になりました。私が今消えても大丈夫と思えるほど、たくましく育っています。何もすることはありません。すべて計算通りに運ばれています。でも、ひとつだけ、計算外のことに気づきました。

――私、まだ生きている。もう何もすることがないのに、私、まだ生きている。

自分のために時間を使おう

きれいさっぱりしてしまった自分の身辺。この状態を意識してつくってきたはずなのに、あまりの完璧さに、自分ながら感心してしまいました。

一時は、自分なりに努力して得た洋裁や着付けの技術を、一人でもいいから他の人に伝えて、自分の受けた恩を一つでも世の中に返してから消えたいと願っていました。が、それも時代遅れの技術であることをこの5年の間に教えられました。今の社会では、一人で着物を着られなくっても、また洋服一枚縫うことができなくっても、何ら不都合は生じないのです。お金がすべてを解決してくれるのです。

だから、自分のために時間を使おう。自分のために残された時間を精一杯生きてみよう。そう決心しました。

1日30分のランニングタイムが1ヵ月後に1時間、1年後には1時間30分になりました。

1984年11月。伊吹山ジョギング大会10キロの部。初めての大会参加というのに、私は、伊吹山の地形をまったく知らず、コースを見て驚きました。それまで平坦な堤防上の道路しか経験したことのない私の足です。自分の無知が情けなくなりました。山をかけ登っていったランナーたちを「人間じゃない、人間の足じゃない！」と心のなかで繰り返しながら、頂上のゴールに向かって滋賀と岐阜の県境をただひたすら歩きました。

大会関係者の方々には迷惑をかけてしまいましたが、この時、非常に多くのことを教えられ、参加して本当によかったと思いました。大勢の人たちが「健康」に目を向け、楽しんで走っている。走っている人たちが個々の走友会をつくり、それらの人に向けて月刊誌が発行されている……。

大会への参加は徐々に増えましたが、自分のまわりに「友」を置くことにはまだ抵抗がありました。しばらくは自分の殻から抜け出すことができず、「淋しいランナー」が続いていました。

そのうち、大会に参加するたびに出会う女性たちに心を許すようになり、自然に会話に加わるようになりました。現在はかつてないほどの走友に囲まれ、また全国にいる走友たちは、それぞれに私の生活に潤いをもたらしてくれます。

欲を捨てて健康ランニングへ

「走り」の中に「欲」が見え始めたのと、走友ができ始めたのと同時ではなかった

かと思います。私の中の「負けず嫌い」が強く作用し始めたのです。

1989年4月、浜名湖1周52キロのウルトラマラソンに参加、目標を4時間半にセットしました。39キロのエイドステーションまで計算通りです。予定通りのゴールを疑いませんでした。が、40キロ過ぎて胸の傷口が動き始めたのです。

――乳ガンを忘れたのか！この傷口を忘れていい気になるんじゃない！

確かに、傷口がそう言ったように思えました。

残りの12キロは、欲を出した醜さ、愚かさへの反省の2時間になりました。

その後、傷口の痛みは消えず、もう走れないと思いながらも毎日のランニング10キロは続けていたのです。しかし、やがて仕事にも支障が出始めました。完全にノックアウト。無理をするのはやめよう、走ってはいけないんだ……。

鉛のかたまりが傷口にはりついたような、重く、苦しい、淋しい日々が続きました。走れない、走れない……！

そして、ついに最後のランニングと決めて、今まで走ってきた一番長いコースをゆっくりと走り始めました。公園を抜け、18キロほど走った時です。

――うーん、まさか？大きく息が吸える！平常呼吸ができる！傷も痛くない！

飛びました。この身体が大きく浮きました。そうです、飛んだのです。鉛のかたまりが落ちたのです。家までの5キロが天国へ続いているように思えました。

ゆっくり、長く走り、走っている時を十分楽しもう。私の健康ランニングの始まりです。乳ガンの傷跡も私の一部。それがようやくわかりました。そして、ランニングを始めた時の自分、つまり初心に返ることができたのです。走り初めて4年、遠回りをしました。

苦い思いをしたあの浜名湖1周52キロのウルトラマラソンも、健康ランニングに切り替えた1年後には、楽しみながら楽にゴールできました。サロマ湖100キロマラソンも、ゴールしたくない、もっと走りたいという気持ちで11時間の走りを楽しみました。

参加した大会で印象に残っているものに、諏訪湖1周マラソン（16.7キロ）があります。

1989年9月、第1回大会で、もの珍しさも手伝ってか、コースの沿道は人でいっぱいです。最初、まわりの人につられて走ってしまい、途中で息抜きをしたいと思ったのですが、沿道の声援が途切れることなく続くものですから、ゴールまでがんばってしまいました。結果は、年代別で36位です。

ゴール後、地元企業の協賛で参加者に抽選でプレゼントがあるというので、くじ運、男運に見放されている私でも、かすかな期待を抱いて待っていました。いよいよ目玉商品のホノルルマラソン招待の抽選が始まりました。男性の方は、二度もくじを引き直し、三度目の正直で当選者が決まりました。では、女性はどんな人が幸運を引き当

てるのだろうかと、舞台がよく見える位置に移動した時です。ゲストの伊藤国光さんが引き当てたゼッケンは、なんと私のものでした。思わず、飛び上がって喜んでしまいました。

生きるために生きる

諏訪湖マラソンの１週間後、長男の卒業式がありました。商船専門学校のため、卒業式は９月に行われるのです。前日、息子と二人で鳥羽港の見える山間のホテルに宿を取りました。入学式以来でした。あれから５年半の月日が流れたのです。

――母さんのガンが再発したら、その時は学校あきらめて一人で生きる道を探してよ。母さんを恨まないでね。

早朝、ホテルの周囲を走っていると、息子が入学した時のことが思い出され、涙が止まりませんでした。

卒業式当日、この息子は、何もできなかった母親に大きなプレゼントをくれました。船舶最優秀賞（１年間の航海実習の結果、最優秀者に贈られる）を授与されたのです。涙線がゆるみっぱなしの一日でした。

今、私、気づきました。スーツにハイヒールで一生懸命「いい女」を演じていた私はいつの間にかいなくなり、代わりにジーパンにランニングシューズで過ごしている自分に気づいたのです。仕事上でも、外見だけの「いい女」は必要なくなったのです。スタイルもバスト90cmはもうやめました。胸パットも時々置き忘れるようになりました。飾る必要のない、肩ひじ張って生きる必要のない生活を手に入れたのです。

大会参加のたびにいただくゼッケンも、昔とった杵づかとやらでウエアやズボンに仕上げました。ビニール製のゼッケンはスポーツバッグにと、捨てるものは何一つありません。

日本史の大好きな私は、日本全国どこへでかけても、その時代と、その時生きていた人たちの息吹を感じることができます。幸いなことに、大会は至るところで開催されているので、子供たちが二人とも社会人になった今、日本史をもっと勉強して日本史とランニングの旅を合わせて、全国の大会に参加してみたいと思っています。大きな夢です。

人間、「何のために生きるのか」ではなく「生きる」ことがすべてであることも、最近ようやく感じとったことでした。

（「私の健康マラソン記」
ランナーズ・ブックより転載させていただきました。鈴木さんはウルトラマラソンのトレーニングであぶらむの宿を度々ご利用下さっている方です。）

後援会事務局だより

日頃、“あぶらむの里建設募金”にご協力いただきありがとうございます。

昨年11月に発行したあぶらむ通信11号で、公益社団法人取得へ向け、当面「権利なき法人」として新たな体制で出発する旨のお知らせをして以来、何のご連絡もせず誠

に申し訳ありませんでした。今回、漸く、会員登録のお願いのパンフレットが完成しましたので、同封させていただきました。詳細はパンフレットをお読みいただきたいと思いますが、一人でも多くの方々が、あぶらむの会の活動に加わって下さり、土台のしっかりした幅広い活動を行っていきたいと心より願っておりますのでよろしくお願いいたします。

会員の方々による設立総会は秋に予定していますが、実質的には、「権利なき法人」として活動を開始することにしました。これまでは、募金およびあぶらむ債の募集はあぶらむの会後援会が窓口となってきました。これからは、あぶらむの会が、会費および募金の窓口となります。したがって、振り込み口座も変更になりますので、お間違えのないようお願いいたします。新しい口座は次のとおりです。会員登録と並行して1992年度分の会費の徴収も開始したいと存じますのでよろしくお願いいたします。

郵便振替　名古屋０－　88065　あぶらむの会

なお、あぶらむの会後援会で募集しました募金およびあぶらむ債の後援会口座の残金はすべてあぶらむの会に移すことにしました。また、あぶらむ債の返還に関しては、あぶらむの会およびあぶらむの会後援会が責任をもって行います。

新しい３人の仲間を迎え、スタッフハウスの建設も始まりました。本当に遅々とした歩みではありますが、確実に大地に根をおろし、初期の目的に向かい進んでおりますので、今後共一層のご協力とご理解を賜りたく、よろしくお願いいたします。

５月20日現在の募金ならびにあぶらむ債の申し込み総額は以下のとおりです。

募金申し込み総額　37,733,703円

あぶらむ債　24,600,000円

○５月20日現在のあぶらむ債申し込み者（順不同、敬称略）

清水幸平　河野裕道・礼子　市川秀一　鈴木隆幸　鈴木逸人　竹内正信

○５月20日現在の募金申し込み者（順不同・敬称略５月20日以降の方は次号にて）

水戸部賀津子　下田英一・由香　江田宜子　宮川あつみ　沢田京子　中村洋　糟谷珠子　広瀬喬　島田晴子　佐口哲　飯田麻子　滝沢助蔵　北川剛・麻理子　筒井啓子　橋本禮子　萱間美帆　木田献一　吉田修　瀬川信子　沼尾紀勝　小野宏　本田リン　近藤真紀　佐藤耕一　高橋秀夫　後藤元彰　岸元忠義・静江　瀬堀信一　阿久津富夫　菅野和子　東璋子　池田一徳　リチャード・メリット　米田亜紀　安藤希代絵　河崎直　吉岡邦英　比嘉良侑　百々洋子　長江弘　木村敦子　近美子　松本信代　菊澤満喜子　萩原久子　戸塚恭子　高柳美一　東京聖テモテ教会奉仕会　松戸集会伝道所　新倉俊吾・久乃　本井雄次　中山弘　百井幸子　上田敏明　祈りの家教会　寺西裕子　磯貝澄美子　桜井真弓　熊谷一綱　関正勝　宗像千代子　久保田彰　松岡和夫　川合武明　菊地栄三　松居勲　竹田純郎　岡登正子　高橋光江・富美江　木村晃男　岩間光雄　畑井正晴　佐々木紀久江　秋野京子　加納厚・美津子　神子沢新八郎　太田喜元　武井秀雄　名古屋学院大学宗教部　鈴木博士　木村清一　渡辺幸　猿田長春　梶原恵理子　宮田昌彦・美子　立教高校学友会　むらさき草の会　鏑木静　神戸紀子　W・F・ハナマン　田坂昭範　安斎勇夫　味岡敏江　二宮ノブ　石井秀夫　石川眞安　入倉明子　遠藤祐輔・栄子　島谷晴朗　堀江武　土井豊枝　成井恵　財満研三郎・由美子　形部賢　森田トミ　長谷川牧子　井原洋子　吉本孝美・美代　吉本正・喜美子　京都復活教会　山田益男　石井正郎・光子　森川清一　三原達也　森本光生　藤倉待子　宮城タケ　知念ハル　神島洋二　嘉数弘子　徳田その　大城つる　深川愛隣学園友愛奉仕団　太平真生　斉藤孝　赤井充也　中屋源兵衛　清水幸平　町野紘　沢田耕作　鈴木芳子　中村紀代男　小原孝子　谷市三・孝子　谷信治　古沢タイ竹田真　堀内昭　富山マリア教会婦人会　山崎玲子　矢沢栄子　喜多計世　大畑邦男・洋子　藤本隆他友人　糸数宝善・敦子　宮田靖匡　波多野春子　立教女学院　松島理恵　マツウラノブオ